

【報告】

「看護学術誌における適正な教育的査読」研修会の報告

井上 菜穂美 酒井 昌子 石井 敏弘

聖隷クリストファー大学 看護学部 紀要委員会

Workshop on appropriate educational peer review
in nursing journals

Naomi Inoue, Masako Sakai, Toshihiro Ishii

Editorial Committee for Bulletin of Department of Nursing,
Seirei Christopher University

《抄録》

看護学部紀要は、2007年度から学術水準を保証するために査読制度を設けており、紀要委員会の依頼を受けた複数の専任教員が査読を行い、論文掲載の採否を決定している。そこで、今年度の委員会の事業計画に「学部教員を対象とした教育的査読に関する研修会の開催」をあげ、教員が適切な査読を行うことができるよう、「看護学術誌における適正な教育的査読」をテーマとする研修会を開催した。本稿では、研修会の内容及び参加者のアンケート結果について報告する。アンケート結果から、研修会の難易度は「概ね適当」であり、本研修会は査読者にとっても、論文投稿者にとっても総じて「有用」であったことが示された。

《キーワード》

看護学部、紀要、査読、研修会

I. はじめに

看護学部紀要は、1992年に「聖隷クリストファー看護大学紀要」が創刊されて以降、「聖隷クリストファー大学看護学部紀要」となり今年度で第24号を迎え、看護学部専任教員の研究論文、調査報告書、各委員会活動や教育活動の活動報告等を掲載してきた。本紀要には、紀要の学術水準を保証するために2007年度から査読制度が設けられ(石井 他, 2008)、2～3名の専任教員が査読を行い、投稿論文掲載の採否を決定している。また、査読制度の評価においては、概ね良好に査読が行なわれていると評価されている(石井 他, 2010)。しかし、査読を担当する教員によっては、論文投稿および査読の経験が浅く、投稿者の論文を審査し、より良い論文にするための過程において困難を抱えていることが推測される。そのため、2015年度の紀要委員会の事業計画に「学部教員を対象とした教育的査読に関する研修会の開催」をあげ、本学紀要のみならず、各学会誌の編集委員会から依頼される査読においても教員が適切な査読を行うことができるよう、査読に関する研修会を開催した。本稿では研修会の内容及び参加者のアンケート結果を報告する。

II. 研修会について

1. テーマ:「看護学術誌における適正な教育的査読」
2. 開催日時:2015年10月21日(水)17時から19時までの2時間(質疑応答を含む)とし、専任教員が参加しやすいよう、定例教授会の終了後に開催した。
3. 講師:岡山大学大学院保健学研究科 秋元典子教授

4. 参加者:看護学部 専任教員 47名

5. 講義内容の概要

投稿論文をより良い論文にするためには、研究者、投稿者にとって、査読のありようが大きく影響を及ぼす。査読者のコメントを受け、投稿者がどのような気持ちになるか、研究者としての礎になって成長していけるだろうか、とイメージして査読することが何よりも「教育的」な査読であると考えられる。

1) 査読(peer review)とは

査読とは、学術誌に投稿された原稿を採否することであり、refereeすなわちjudgeであり、同じ分野の専門家が行う審査である。本来の査読は「審査」であり、斟酌や指導というニュアンスは含まれないのが前提である。査読の結果を受けて、査読者と投稿者とが顔の見えない書面上の議論を経るため、投稿者の査読意見書に対する回答は、すべてに答えること、誠実に答えること、根拠をもって答えることの3つを順守することが原則となる。査読は学術誌のレベル低下防御システムであり、質の低下を防ぐために不可欠なプロセスである。投稿者にとってのメリットは、自分の原稿の内容を改善する機会を得るということである。また、査読者にとっては守秘義務を課せられながらも、投稿者が伝えたいことを過不足なく読み手に伝わるようにするにはどのように修正したらよいか、相手の立場に立つサポートティブなcritiqueな能力を培う、非常に貴重な学習の機会である。

査読は「著者と査読者と編集委員会の協働、collaborateによって、より良い論文を生み出していく過程」である。査読の本来のあり方は、査読者が、投稿者にとって論文を修正するエネルギーや見通しが湧くような査読を行い、投稿者もそのコメントを素直に受けて丁寧に回答するというそれぞれの働きによって、論文の完成

度を高めていくことである。3者でより良い論文を生み出していくというスタンスを基盤に置くことが重要であろう。査読者としてこの基本的なスタンスを心に留め、未発表の貴重な論文を読む機会を頂いたことについて投稿者にお礼と敬意を表することが大切である。投稿者の努力のプロセスに敬意を表したうえで、査読意見書には心温かいコメントを書くように心がけている。

2) 教育的査読とは

査読とは論文の採否を決めるための「審査」であり、若い研究者の指導の場ではないという考えが世の一般であろう。本来の「審査」である査読に教育的配慮、あるいは指導という意味を込めながら審査し、査読意見書にコメントしよう、という意味で「教育的査読」をとらえていきたい。

教育的査読を行う上での最も大切なことは、結果を読むことである。方法論ばかりにこだわらず、得られた結果を発信していくためにどのように論文を修正していけば良いか、この論文で主張したいことは何か、を探しながら読む。

査読は referee や judgement ではあるが、研究者や教育者を育成するという意味を含めて教育的かつ建設的で、投稿者が納得でき、修正可能で具体的な指摘をすることが重要である。投稿者が納得できるためには、査読者個人の感覚だけではなく、根拠をもってコメントすることが大切である。修正事項がある場合に重要なことは、具体的に「何ページの何行目」と修正箇所を示すこと、なぜ修正が必要なのかを筋道立てて理論的に説明することである。また、この論文を採用するためにクリアしていかなければならないメジャーコメントと、誤字脱字や投稿規程からの逸脱等のマイナーコメントにカテゴリーを分けて、丁寧に査読意見書を記載するこ

とが、教育的査読のひとつの姿であろう。

3) 教育的査読の実際

学術誌の多くは、一定の基準を保持するために編集委員会で査読ガイドラインを作成している。原稿が送付されると、利益相反を確認し、査読ガイドラインに沿って査読を行なう。利益相反は現在大きな問題である。原則、投稿者の氏名が伏せられたブラインド査読であり、投稿者を特定できないが、論文内容から利益相反が疑われる場合には、査読者は自ら辞することも必要である。

メジャーコメントに含まれるべき10のポイントを説明したい。最初に査読すべきことは、「この学術誌の守備範囲に関する研究課題であるか」である。査読が依頼された時点で、投稿規程が守られ、利益相反がなく、その学会誌の範疇に含まれていることを編集委員会が判断している。しかし、編集委員会で査読者の意見を求めるような判断がなされると、査読者として確認すべき内容となる。

2番目は「新規性があるか」である。最近の学術誌は、研究報告をなくし原著のみとする傾向があるが、リサーチとして新しさがあるかどうかを見る必要がある。

3番目は「学術誌の守備範囲の発展において、学術的価値、有用性、学問・実践に貢献するものであるか」である。これは結果を良く読み判断する。

4番目は「未発表のものであるか」である。編集委員会も確認しているが、査読者もインターネットのキーワード検索により二重投稿でないことを確認する。

5番目は「倫理的配慮がなされているか」である。この一点が不十分であった場合、その段階で reject (不受理) と判断される重要な事項である。しかし、倫理審査を受けているにも

関わらず記載されていない場合があるため、一度は修正の機会をもつようにする。

6番目は「文章表現がわかりやすく内容が明瞭で、完成度が高いか」、7番目は「英文抄録の内容や表現が妥当であるか」である。これらについては十分に修正が可能であるため、投稿者に修正点を提案すればよく、すぐに不採用にする必要はない。

8番目は「論旨に一貫性があるか」である。初回査読で一貫性がないから不採用、と決めつけるのではなく、どこで論旨の一貫性が飛躍または乖離しているのか、修正できるようにコメントすることが教育的な査読である。

9番目は「文献活用は適切であるか」である。学説やガイドラインが変わっているにも関わらず古いものを使用していないかを確認する。

最後に「投稿規程に沿って書かれているか」は、編集委員会も確認しているが、査読者としても念のために確認する必要がある。教育的査読では、修正箇所をメジャーコメントで明確に指摘しつつも、投稿者に修正のチャンスを持って頂くことが大切であろう。

次に、投稿論文を読む際の細かいポイントについて説明する。

まず、「研究題目」は、論文の内容を反映しているのかを確認する。投稿者が修正できるようにコメントすることが大切である。次に、「keywordが適切である」は、データベースでピックアップできないような場合には、このようなキーワードの方が検索してもらえるのでは、と提案しても良いだろう。

「要旨」は投稿規程に従い記述するが、投稿規程がない場合には、目的、方法、結果、考察、結論が明瞭に記載されていることを確認する。「英文抄録」は、和文抄録と整合しているかを確認する。

「研究の背景」では、先行研究の十分な検討のもと研究課題が導かれているか、最新の文献が使われているかを確認する。査読者が具体的に最新の文献を提示しても良いだろう。

「理論的基盤」では、用いられる理論的基盤が、研究領域や研究課題と合致しているかどうかをみていく。

「研究の意義」では、この研究結果がその領域の発展に寄与できるかを丁寧に査読する。倫理的配慮にも直結するが、この研究にどのような意義があるのか、どのように看護に還元できるのかを明確に示しているかどうかをみる。

「研究目的」では、明らかにしようとしていることが明確にされているかどうかをみるが、書き方が非常に未熟で適切に表現されていない場合もある。

「用語の定義」は、研究課題にそった用語の定義がされているかをみる。

「研究デザイン」は的を射たものであるかどうかをみる。例えば、質的研究デザインには『質的帰納的研究デザイン』、『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)』、『KJ法』等が使われているが、研究方法によっては研修を受けなければ使用できないものもあるため、注意が必要である。

「研究対象」は標本および母集団が研究課題と適合しているかを見る。また、対象の除外条件を明確に記述しているかを確認する。

「研究の場」について、研究を実施した場の特徴が明確に述べられているかを見る。フィールド名は伏せて記述するが、倫理審査を受けた施設名に関しては、投稿論文の正本に固有名詞を示す必要があるため、注意が必要である。

「調査内容・測定指標」は、調査内容が目的と合致しているか、分析方法、データ処理方法が適切であるかを見る。特に質的研究の場合、

『KJ法』、『現象学的分析法』、『解釈学的分析法』、『M-GTA』、『ストラウス・コービン版のGTA』等、ビッグネームを持つ分析法が多くある。ビッグネームを用いることが重要なのではなく、データ分析の過程を他者が追試できるように明確に記載することが重要である。

査読する上で最も重要なのは「結果」である。結果がデータの分析に基づいており、研究方法の示し方と合致しているのかをみる。そして、順序立ててわかりやすく説明されているか、結果の中に考察が紛れ込んでいないかを確認し、紛れている場合は区別して記述するようコメントし、修正の機会を設けることが大切である。

「考察」の記述方法は人それぞれであるが、結果から飛躍のないディスカッションができていくかをみることが大切である。

4) 査読者としての留意事項

査読者として大切なことは、査読を依頼されたら基本的には断らないことである。自分の専門とはかけ離れた論文の査読が依頼されたとき以外は、専任査読者は断るべきではないと考えている。そして、守秘義務が生じるため内容を口外しないこと。査読意見書の回答期限を守ること。何らかの事情で期限を守れない場合には、編集委員会に一報入れることを忘れないでほしい。また、査読意見書は誤字脱字のないように記載すること。同様に、査読意見書に不用意に査読者氏名を書かないことは、査読者としてのルールである。

教育的査読の内的な構えとして、未発表の論文を誰よりも先に読ませて頂けることへの感謝の気持ちを持って査読すること。そして、不足箇所を探すのではなく、より良い論文にしていこうためにはどうすればよいのかを指摘することが大切である。自分も研究者の一人であり、査読する側と査読される側は表裏一体であること

から、自分も完璧ではないことを心に留めて、誠実に、謙虚に査読を行なう。何よりも、投稿者の立場に立って、この査読結果を受けとったときにどのように思うのかを想像してみる。当然、不採択であると伝えなければならないこともあるが、その際には言葉を尽くしてコメントすることが大切である。そして、主語述語を明確にして投稿者が理解できる文章で書くことも教育的査読のひとつである。著者の人格や知的独立性に十分な敬意を払い、上から目線でのコメントの記述は避けてほしい。

投稿者として査読結果への回答をするときには、査読意見書のコメントについて「すべてに答えること」、「誠実に答えること」、「根拠と共に答えること」が不可欠な姿勢である。このことは、査読者として査読を行なうときには「投稿者が回答できるようなコメントを書くこと」、「誠実に査読すること」、「なぜ修正が必要なのかを根拠をもって説明すること」が不可欠であることと表裏一体の関係にある。

査読とは「著者と査読者と編集委員会の協働によってよりよい論文を生み出していく過程」である。どうか投稿者の立場に立った教育的査読をして頂きたい。

Ⅲ. 研修会についてのアンケート調査

参加した専任教員を対象に、本研修会の評価を得るために無記名自記式アンケート調査を実施した。

1. 方法

調査内容は、①回答者の背景（所属および職位）、②研修会の難易度、③学術論文の査読を行う観点からの有用度、④学術論文を作成する観点から有用度、⑤その他（自由記述）とした。

さらに、⑥紀要委員会に対する要望（自由記述）、を調査した。

②研修会の難易度は、「難しい」「やや難しい」「概ね適当」「やや平易すぎる」「平易すぎる」の5段階、③および④の有用度は、「有用」「やや有用」「あまり有用でない」「有用でない」の4段階および「わからない」の5段階で評価し回答するよう依頼した。

アンケート用紙は、研修会の資料とともに会場の机に個別に配布し、研修会終了後に専用回収箱への提出を依頼した。

2. アンケート調査の結果

研修会の参加者は47名（参加率83.9%）であり、アンケートは42名から回収された（回収率89.4%）。

※看護学部の専任教員は2015年10月1日時点で56名（学長含む）

①回答者の背景（表1）

所属を「看護専門領域・助産学専攻科」と回答したもの35名（83.3%）、「その他」4名（9.5%）、「無回答」3名（7.1%）であった。

職位は、「教授」と回答したもの13名（31.0%）、「准教授」7名（16.7%）、「講師・助教」21名（50.0%）、無回答1名（2.4%）であった。

表1 回答者の背景 (n=42)

所属	
看護専門領域・助産学専攻科	35名 (83.3%)
その他	4名 (9.5%)
無回答	3名 (7.1%)
職位	
教授	13名 (31.0%)
准教授	7名 (16.7%)
講師・助教	21名 (50.0%)
無回答	1名 (2.4%)

②研修会の難易度（図1）

「やや難しい」と回答したものは1名（2.4%）、「概ね適当」39名（92.8%）、「やや平易すぎる」1名（2.4%）、「平易すぎる」1名（2.4%）であった。

③学术论文の査読を行う観点からの有用度（図2）

「有用」と回答したものは39名（92.8%）、「やや有用」2名（4.8%）、「わからない」1名（2.4%）であった。

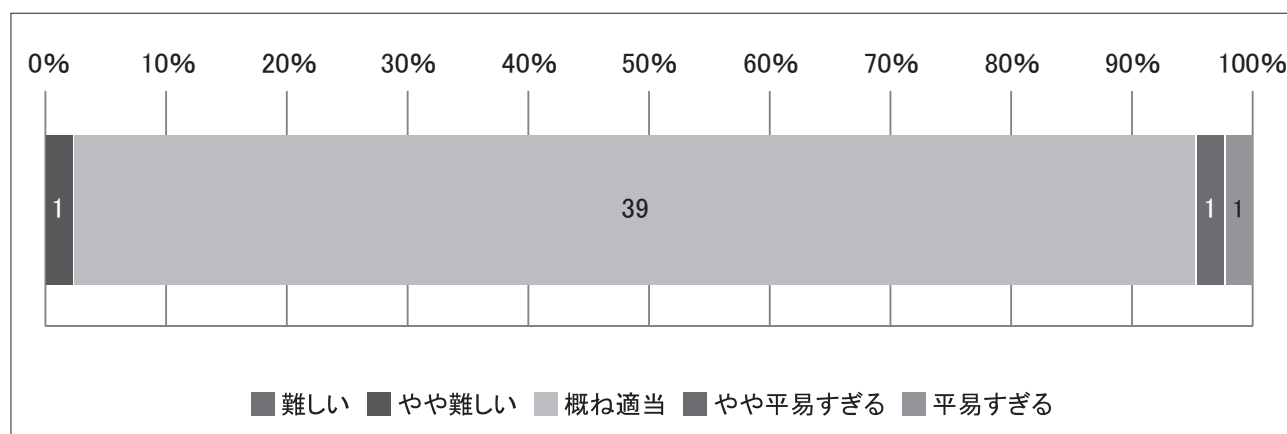


図1 研修会の難易度

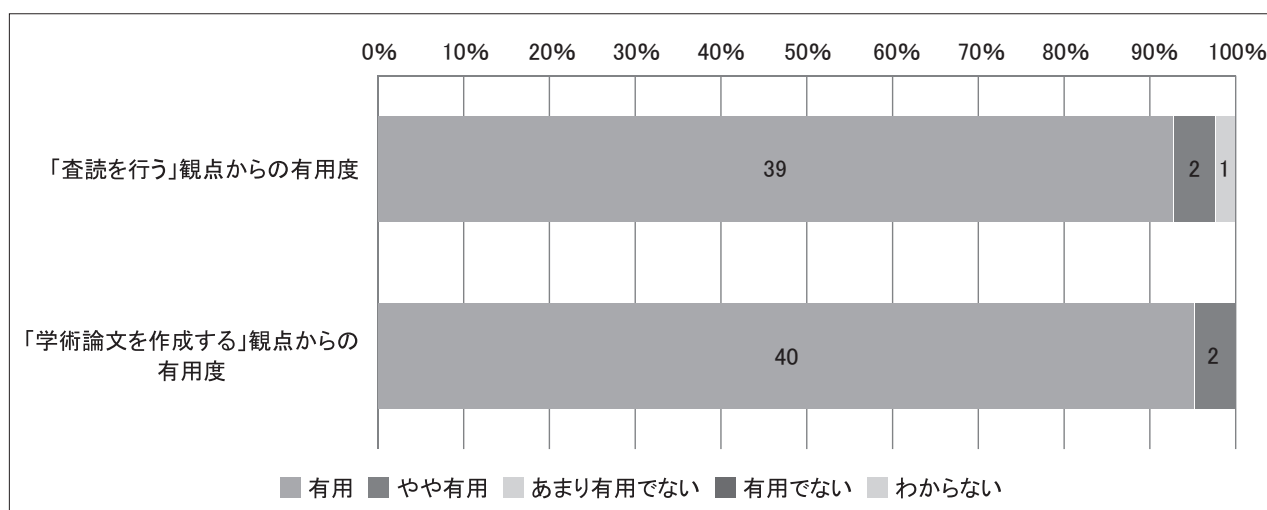


図2 研修会の有用度

④学術論文を作成する観点から有用度 (図2)

「有用」と回答したものは40名(95.2%)、「やや有用」2名(4.8%)であった。

⑤その他(自由記述)

この項目は22名(52.4%)が記述しており、記述内容は、「査読者にとっても投稿者にとっても、とても役立つ核心をついた内容で、有意義な研修であった」、「自分の投稿や査読を行うことに生かしたいと思う」、「とても納得できた。相手を大切にしながら査読に励みたい」、「大変わかりやすく、経験談に頷く内容が多かった」、「具体的な内容で投稿者、査読者の立場からの視点がよく理解できた」、「論文投稿する際に参考にしながら執筆していきたい」等、研修会の内容についての記述であった。また、「とてもエネルギーッシュな講義で元気をもらえました」、「投稿者としても先生のように温かい気持ちで読んで下さると頑張れます」等、講師に対する感謝についての記述もあった。一方で、「全教員が同じく参加するべきだったのか」という研修会参加への問いが記されたものもあった。

⑥看護学部紀要委員会に対する要望(自由記述)

この項目は4名が記述しており、それらの内

容は、「教授会を含め拘束時間が長く、精神的にも肉体的にも負担が大きい」、「研修会の時間を1時間程度に収めてほしい」等、研修会の開催時間および研修時間に関する要望であった。

その他、「今日の研修内容は本学部紀要の査読にも役立つだろう」という感想が記されていた。

3. 考察

①回答者の背景

研修会には看護学部専任教員のうち47名(参加率83.9%)が参加し、42名からアンケートを回収(回収率89.4%)できたことから、集計結果は教員の総意が概ね反映されていると考える。参加率が高かったことは、教授会と同日に研修会を開催したことにより、臨地実習担当教員も参加しやすい日程であったこと、本学部教員の査読に関する意識の高さによるものと推測される。

また、参加者のうち「看護専門領域・助産学専攻科」の教員は35名(83.3%)であり、研修会の講師が日本看護学教育学会誌の編集委員長をはじめ、日本看護科学学会誌、日本がん看

護学会誌等の看護学術誌の査読委員として、豊富な経験をお持ちの秋元典子先生であったことも、参加率およびアンケート回収率が高かった一因であると考えられる。

②研修会の難易度

「概ね適当」と回答したものが39名(92.8%)であったことから、研修会の難易度は「概ね適当」であったと考える。「やや難しい」、「やや平易すぎる」および「平易すぎる」と回答したものは各1名(2.4%)であり、これまでの研究者としての論文投稿および査読の経験によって、査読に関する知識やとらえ方が異なっていたものと考えられる。

③学術論文の査読を行う観点からの有用度

今回の研修会は「有用」と回答したものが39名(92.8%)、「やや有用」が2名(4.8%)であったことから、査読を行う観点からの有用度はきわめて高いと認識されていたと考える。この結果は、「⑤その他」の自由記述で「とても納得できた。相手を大切にして査読に励みたい」、「大変わかりやすく、経験談に傾く内容が多かった」等の意見が示されたように、講義内容には講師の豊富な経験談が織り交ぜられ、実際に査読を行なう場面を想像できる具体的な内容であったことが要因と考えられる。また、本研修会のテーマである「適正な教育的査読」について、従来の論文掲載の採否を判断する judge を主眼とした査読制度とは異なる視点での、投稿者の立場を尊重した査読の在り様について講義されたことも、参加者にとっては新鮮であったものと思われる。

④学術論文を作成する観点から有用度

今回の研修会は「有用」と回答したものが40名(95.2%)、「やや有用」2名(4.8%)と合わせて参加者全員が有用であると評価した。「③査読を行う観点からの有用度」と比較すると、

若干ではあるが「有用」と評価した参加者が多い。これは、①の回答者背景に示したように、研修会の参加者のうち講師・助教が21名(50.0%)と半数を占め、講師・助教は査読者に比して投稿者の立場をとるが多いことから、学術論文を作成する観点からの有用度が高かったものと考えられる。また、「論文投稿する際に参考にしながら執筆していきたい」等の複数の記述が得られたように、本研修会で「教育的査読の実際」として説明された内容は、投稿者の立場として重要な事項に関して、具体例を用いて詳細に説明されたため、論文を作成する際に活用できる内容であったことも要因のひとつであろう。

⑤その他(自由記述)

自由記述の内容は、「とても役立つ核心をついた内容で、有意義な研修であった」、「具体的な内容で投稿者、査読者の立場からの視点がよく理解できた」等、研修会に関する内容とともに、講師の秋元先生への感謝の言葉が多く記載されていた。査読者としての立場だけでなく、投稿者としても活用できる内容をご講義頂いたことで、査読意見書のコメントへの対応に難渋する研究者にとって、勇気づけられる研修会であったと考える。秋元先生のパワフルであたたかな講演により、参加者は意図せずともエンパワーされていたのかもしれない。

一方で、「全教員が同じく参加するべきだったのか」という問題提起と解し得る記述があった。今回の研修会のテーマは「看護学術誌における適正な教育的査読」であり、看護専門領域および助産学専攻科に属さない専任教員や、すでに査読者としての十分なキャリアのある教員にとっては、新たな知見に乏しい研修会と認識された可能性も考えられる。今後の研修会を企画する上で検討していきたい。

⑥看護学部紀要委員会に対する要望

この設問の記述内容は、「拘束時間が長く負担が大きい」、「研修会の時間を1時間程度に収めてほしい」等、研修会の開催時間および研修時間に関する要望であった。

看護学部紀要は従来、投稿論文の提出期限を10月末としており、投稿論文を執筆する上でも本研修会の内容を活用できるよう10月までの開催を計画していた。しかし、臨地看護学実習が10月から開始されることから、実習担当教員も参加しやすいよう、講師・助教以上の専任教員が全員出席する教授会に合わせ、研修会の講師と日程を調整した。そのため、教授会開始から研修会終了まで、休憩をはさみながらも約5時間を要することになった。長時間に及ぶ研修会への参加は、日々の教育・研究活動で多忙な教員にとって、身体的、精神的負担が大きかったと推測される。今後、委員会開催の研修会を企画する際には、開催日および時間の設定、休憩時間の活用について検討していきたい。

IV. おわりに

看護学部紀要および各学会誌の編集委員会から依頼される査読において、教員が適切な査読を行うことができるよう、教育的査読に関する研修会を開催し、研修会の内容および参加者のアンケート結果を報告した。アンケート結果か

らは、本研修会は査読者にとっても、論文投稿者にとっても総じて有用であったことが明らかとなった。一方で、研修会の開催時間、研修時間、研修への参加について課題を得ることができた。今回の研修会で得られた知識を活用して、投稿者の立場に立った教育的査読を行なうことでより良い論文を生み出していき、本学紀要のさらなる発展に努めていきたい。

秋元先生より、学術誌の査読に関して「看護研究」にご執筆されていることのご紹介がありました（秋元典子（2015）日本看護学教育学会の査読の動向．看護研究，48（7），695-699）。

非常にご多忙な中、研修会の講師をご快諾下さった秋元典子先生に改めて深く感謝申し上げます。

文献

- 石井敏弘，入江拓，松井謙次，他（2008）聖隷クリストファー大学看護学部紀要における査読制度の創設．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，16，91-99.
- 石井敏弘，青木孝之，炭谷正太郎，他（2010）学部教員による，聖隷クリストファー大学看護学部紀要の査読制度に係る評価．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，18，53-61.